

若き高校生のエネルギーに期待する

研究協力員 海老原 治 善

事態は絶望的か

新しい学年を迎え、心を新たに生徒諸君も、教職員の皆さんも出発したことだろう。それにしても、教育の“荒廃”が叫ばれてもう随分久しい時が流れている。しかし“荒廃”は年々深刻の度をましている。女子高校生の校門圧死事件に驚かされ、昨今では、姉妹の刺死事件までがおこる暗澹たる状況のなかにある。登校拒否、中途退学の傾向も拡大の一途をたどっている。公立学校への不信はたかまる一方で、私立志向の趨勢も上昇の一途をたどっている。

こうした状況を見聞すると、状況は絶望的であり、教育は空洞化し解体化していくのではないかとといった不安もひろがってくる。ジャーナリズムは、こうした傾向の報道をこれでもか、これでもかと流しつづける。たしかに否定できない現実であり、直視しないわけにはいかない。しかし、私は、そうであるからこそ、もはや絶望的なのか、若き生徒諸君のエネルギーは枯渇してしまったのかと思う。決してそんなことはない。注意してみれば、やはり、今日の若者らしい感性に立ち、問題にむかってアクションをおこしてくれている生徒諸君もまた存在していることも確かな事実なのである。



問題意識・自覚・行動へ

逗子高での学校5日制にかかわるアンケート調査によると、土曜日休日となったらどうすすかの問いにつぎのように生徒諸君は答えている。

- | | |
|----------------|-------|
| 1. 友人との交流を深める | 70.3% |
| 2. 趣味・教養の向上を図る | 33.3% |
| 3. 休養 | 25.3% |

多忙な生徒たちの生活のなかで、一番、欲しているのが、友人との交流である。いわばここに活性化のエネルギー源があることが証明される。人間的ふれあいの要求は、人間の基本要求だ。この

充足こそが、元気の出る拠点である。逆にいえば、ぎりぎりの要求ともいえる。

さらに逗子高校2年生の「すだち」（91年度の現代社会論述集）によると、「ぼくたちも、ちゃんと考えている」では、つぎの問題関心が表明されている。

- 1 差別（不正、公正）、偏見（性・被差別部落）
- 2（湾岸）戦争、地球破壊・環境問題
- 3 政治、経済（憲法問題、食料輸入自由化、教育問題）

（以上『学校5日制と地域社会 今、私たちに何ができるか』逗子青少年指導員連絡協議会報告より）

現代の問題状況へ適格な関心の表明といえる。この関心に真正面から授業がとりくみえているかどうか問題となる。教師側の答えは進度が遅れてしまう、受験とは関係がうすいという理由で、避けられる傾向にある。若い感性は、大人以上に、自からが大人から差別され勝ちなところから差別問題に敏感である。障害者・高齢者・福祉への関心をもっている。また未来に生きるがゆえに、戦争・環境問題への関心も高い。

さて、問題関心をもっているだけでなく、機会があれば行動を通して参加する意欲もある。学校5日制試行の県下海老名高校の実践もこの方向を示唆している。「近くの養護学校との交流活動が花を開きつつあることは喜ばしい。音楽、卓球、野球、ソフト・ボールなどのクラブ活動を共にすることにより、本校の生徒はもちろんのこと養護学校の子どもたちの目を輝かせるようになり、当初三回の計画を更に継続しよう、充実発展させようということになった」（『学校運営のあり方実践研究報告書』）としている。

つぎのような報告もある。「『がんばって本当の看護婦さんになってね』。白衣姿もぎこちない高校生が、ベテラン看護婦の後を追う。五月十二日の『看護の日』制定を記念して、大阪府などが『一日看護婦』を、高校生を対象に募集したところ、約二百人が応募、うち六十二人が十八日までの看護週間中に、十一病院で体験した」（朝日 91.5.22）。

「患者と看護婦の会話を通じて、信頼関係を感じ、感動した」と真剣な職業生活にふれ、高校生に貴重な記念体験となったことが伝えられている。

若い感性は地球環境問題を

若い感性は、社会的なハンディをもった人びとへの連帯感とともに迫りくる地球環境の破壊問題への危険感も鋭い。それへのとりくみも次第に活発化している。「環境破壊は未来に生きる若者にとってこそ深刻、と『地球サミット』の青年版『環境と開発に関する世界青年フォーラム』が三月コスタリカで開かれるが、高校生たちが学校の枠を超えて環境問題に取り組むネットワークが動き出している（Student for Our Better World）S B Wで、昨年十月発足、現在五十人ほどが参加している」（朝日 92.3.3）と伝えている。

科学クラブによる地域の酸性雨、河川の水質汚染調査なども数多くの実践がある。若い感性は、社会的矛盾、自然の危機は、大人より敏感にかぎつけている。私たちが、ここに働きかけ共に教え学びあうならば、生徒たちの感性はふきだしてくるに違いない。受験学力向上を一途にすすめる公教育の高校教育に生徒たち自身、問題を感じはじめているのではないか。

高校を卒業し大学に入った1年生に、浪人時代の話を知ると、異口同音に予備校時代は楽しかったという。新聞もよく読んだし、文学書もかじった。なによりも予備校の先生方に公立校教師にならぬ人間味を感じたと語る。人間味あふれる先生が多かったという。公立校が予備校化し、予備校が、青春期の生徒たちの心に響く教育活動が展開されているというわけである。

生徒たちのエネルギーは枯渇してはいない。むしろ私たちの働きかけを待っているのだと思う。

もう待ちきれなくて、行動をおこしはじめているのではないだろうか。つぎの報道からもその一端がうかがえる。

行動をおこす子どもたち

91年8月20日から5日間、京都市で「世界子ども会議」が開かれた。世界62国360人が参加した。十歳位のアフリカの子ども代表は、「子供が病気や飢餓で死ななくてすむようにするには、世界中の大統領や首相に絶対に戦争をしないと約束してもらうことだ。みんな国に帰って大統領に直接言おう」と訴えたという。

また「物が心にとって代わっています。私の国の若い人は、物を買うことの方が鳥が空を飛ぶのを見ることより楽しいと感じている。その一方で森林の伐採など生態系の破壊も進んでいる」と語った。これらの論議を通じ会議は、「国際間の連帯と協力を強化して、子どもの生存、保護、発達を確保するために必要な行動を取るように求める。『子どもの権利条約』をすべての国が批准せよ。世界のすべての子どもは、自国の政府に子どもが健やかに育つように十分な資源を割り当てるよう要求せよ」とする骨子の『地球子ども会議京都宣言』を採択した。（朝日 91.8.24）。

90年11月12日、20万人の人びとを結集してフランス・パリで「教育のための全国大会」が開催された。この原動力は、フランスの高校生たちであったことはよく知られている。若い高校生たちは、今、激動する国際社会の歴史のうねりを、鋭い感性でとらえはじめ、平和、人権、地球環境を守るため、行動を開始しはじめています。日本の高校生たちは、偏差値輪切り、高校間格差、大学入試、管理教育の重圧のなかで、閉塞的状況のなかにあるが、しかし、彼等、彼女等の若いエネルギーは決して枯れはててはいない。

その噴出の水路を求めて彷徨しているのではないかと思う。

商品化の文化に抗して

だが事態は、決して楽観をゆるさない。現代日本資本主義はその活路を求めて、あらゆる物、機能、はては性までも商品化して利潤追求をおしすすめている。その対象として若い世代がある。「一点豪華主義」と称して若い世代の心を刺激する。小さな指輪、誕生石（2万5千円～4万円）、はては10万以上もする真珠も売られる。フランス製子供服が12万円～28万円、はては子ども向けの香水「パルファム・ジバンスイ」も売り出される。刺激の強いビデオ、雑誌、ゲーム類も生徒たちをとりまいている。

チャレンジするのでなく、快楽の海へひきずりこまれる可能性もきわめて高い。それだけに私たち教職員のとりくみの課題も重いといわざるをえない。学校5日制の9月よりの実施を考えると、本格的なこれまでの学校教育の刷新（神奈川高教組の自主編成構想）や、生徒たちのニーズを生かす学校外教育、社会教育の施設、とりわけ相談相手になってくる職員体制の確立がなににもまして重要となってくる。可能性を秘めている生徒たちのエネルギーをどう噴出させるのか、お互いに真剣に考えてみる必要がある。

（えびはら はるよし）

単位認定の弾力化すすむ

1科目でも留年、高校の半数以下に

2月の卒業判定会議から3月の進級判定会議へと続くホットな論議の季節が終わって、再び現場は新年度を迎え慌ただしい日々を迎えている。しかし、評価と単位認定のあり方をめぐる課題は残されたままという学校が多いのではないだろうか。神高教が1992年1月に実施した「高校教育改革に向けたアンケート」結果によると、1科目でも単位が認められなかったとしても、進級や卒業を認めているという学校が54.8%と半数を上回っていることが分かった。

教務規程の進級・卒業について「一定程度、不認定科目・単位数があっても進級・卒業できるようになっている」かどうかを尋ねた項目について、次のような回答が寄せられた。（県立高等学校全日制165分会中135分会が回答を寄せ、回収率は81.8%である。）

①進級・卒業できる規程あり	32校	23.7%
②1科目でも進級・卒業不可	61校	45.2%
③規程はないが、審議して可	42校	31.1%

①と答えた分会で、何科目・何単位までかを尋ねたところ科目数は1～3科目で、単位数まで決めている学校は多くはないが上限は9単位とする学校があった。③については、教務規程にはすべての単位の修得が義務付けられているが、追指導を認めていてその結果が良好であれば単位を認定する学校やケース・バイ・ケースで審議の上単位を認定する学校など様々である。ただし、この項目については集計の段階で②と答えながら欄外に追指導、ケース・バイ・ケース等と記入してあった分会を③に分類したことをお断りしておきたい。そのことを考慮しつつも、①と③を合わせて考えると、54.8%と約半数の学校で学年制をとりながらも単位制へ向けてより弾力的な運用を行うようになっていると言えるのではないだろうか。

再履修・再入学制度は今後の検討が必要

さらにアンケートでは、単位不認定科目を進級の上再履修させるカリキュラム編成となっているか否かを尋ねている。この様な再履修制度を置い

ている学校は3校と極端に少なく、1994年度より導入予定の学校が1校に止まっている。導入を検討中という学校も28校、20.7%で、その他は「検討していない」という回答であった。また、一度退学していった生徒をその学校に再度入学（復学）させるといういわゆる再入学制度については、規程の有無にかかわらず実施している学校が9校であり、検討中が13校と少ない。再履修制度や再入学制度は、現在年間12万人にも及ぶ中途退学者を救済する制度として高校教育改革の柱の1つに据えられているものであるが、その検討が十分でないことがうかがえる。

新教育課程へ向けた改革を

今後の現場での検討に際しては、1994年度から実施が予定されている高等学校学習指導要領の総則に新たに「学校においては、各学年の課程の修了の認定については、単位制が併用されていることを踏まえ、弾力的に行うよう配慮するものとする。」という「努力規程」（文部省『解説』）が設けられたことに留意する必要がある。文部省による解説の中で、「ある学年において修得が認定された単位数が数単位不足した生徒について、一律に原級留置とするのではなく、可能な限り弾力的に運用することとし、学校が定めた卒業までに修得すべき単位数を、修業年限内に修得すれば卒業が可能になるよう配慮することを求めたものである。」と述べている。この部分についての検討を含めた取組みが必要ではないだろうか。

— 神教祖教文研のシンポジウム開催される —

1992年2月29日に、神奈川県教育文化研究所主催の「不登校をめぐる」と題するシンポジウムが、相模原教育会館で100名程の教師・父母・不登校児を集めて開催された。

菅龍一氏をはじめ相談指導学級の中学教師や精神科医らをパネリストに迎え、不登校児を無理に学校に戻そうとするのではなく、ありのままを認めながら子どもの「見えない心」を見つけていくことが大切だと共通して指摘されていた。不登校児で定時制高校で立ち直った大学生の体験談は、会場に来ていた父母や子どもたちに大きな感銘を与えていた。